出 品 目 録　学芸員のつぶやき（キャプションコメント）Ver.

※〝学芸員のつぶやき〟に続く作品解説は、詳細に「図録」（販売冊数限定・完売の際はご容赦下さい）に掲載されています。

前期／2026年10月10日(土)～11月8日(日)
後期／　　11月10日(火)～12月6日(日)

	指定	作品名	学芸員のつぶやき（キャプションコメント）	
第1章　戦国を生きる　ー藤孝・忠興・忠利ー				
1		細川幽斎（藤孝）像	細川家の「武と美」の礎となった武将・文化人	
2		細川藤孝夫人像	幽斎を支えた女傑	
3		細川三斎（忠興）像	「天下一ミシカキ（短気な）人」と称された忠興の面影	
4		細川忠利像	熊本藩の初代藩主となった	
5	◎国宝	柏木蒐螺鈿鞍	貝で描かれたミミズクが可愛い	※前期
6	○重要文化財	細川幽斎書状	「近習を叱って、彼に笛の稽古を付けてやってください」	
7	○熊本県指定重要文化財	黒糸威横矧二枚胴具足	関ケ原合戦を忠興と共に見た	
8		細川ガラシャ消息	「今月はいつ来るのか、待ちわびています」	
9		和歌短冊「たつね行」	幽閉先、ガラシャの思いやいかに	
10	○重要文化財	織田信長黒印状	「少ない軍勢でもよくやった！」	
11	○重要文化財	羽柴秀吉書状	「いつでも軍勢を動かせるように心せよ」	
12	○重要文化財	輝元・秀家・利家・家康連記書状	秀吉を支えた武将たちの署名がズラリ	
13	○重要文化財	徳川家康書状	「石田三成を生け捕りにした。早くあなたに見せたいものだ」	
14		大馬印	白抜きの大きな字が圧倒的	
15		薄茶緋羅紗地陣羽織	西洋のデザインを取り入れた	
16		法螺貝	大きな音で兵士を鼓舞	
17		五輪書	剣豪・宮本武蔵の真髄がここに	
18		正面達磨図	剣豪は絵の達人でもあった	
19		面壁達磨図	体得した禅の精神を、絵筆に乗せて	
20		時雨雁図小柄	武蔵は、小さな武具なら自分で作る	
21		縁頭	武蔵は、刀装具も自分で作る	
22		茄子形提重	つややかな茄子から注いだお酒で一献いかが	※後期
23		橋桜九曜紋蒔絵硯箱	じーっとみていると、心が落ち着くから不思議	
24		橋桜九曜紋蒔絵料紙箱		
25		網代螺鈿貝蒔絵文台硯箱	ひんやりした雰囲気と、輝きに満ちています	
26		黒茶地御簾紅葉模様唐織	鮮やかな紅葉と、御簾の落ち着いた色の対比が美しい	
27		胴箔地扇地紙模様縫箔	着る者に神々しさを与える、金地の能装束	
28		白地花入蜀江繋ぎ向鶴菱模様厚板	幾何学文様の上に菱形の模様を施す大胆さ	
第２章　利休と細川家　ー茶の湯の名品ー				
29	○重要文化財	後深草天皇宸翰消息	「高麗国王からの国書が来た。情報収集を薦めよ」	
30	○重要文化財	大休正念墨蹟　悼聖一国師尺牘	茶の湯の掛物として珍重された、中国の禅僧が書いた墨蹟	
31	○熊本県指定重要文化財	俊成卿定家卿両筆懐紙	定家「父上、御意見をください」、俊成「行間に回答した」	
32	●重要美術品	愚極礼才墨跡「道号説」	中世日本の禅僧は、最先端の中国風の字を書いていた	
33		七仏通戒偈	書き忘れた「善」を、後から足したのがいい！	
34		千利休書状（ほととぎすの文）	「巻物を貸してもらったお礼に、一句差し上げます」	
35		千利休書状	「茶壷は宇治の茶師に渡した。蛤（はまぐり）を二十個いただきありがとう」	
36		千利休書状	「羽柴秀次様の茶壷には、このお茶を詰めるように」	
37	○熊本県指定重要文化財 ※松井文庫蔵	千利休書状　天正19年2月14日付	「忠興様と古田織部様が見送りに来てくださった…」	
38		芒菊桐紋蒔絵碁笥・碁盤	利休が持っていたと伝わる、秋の風情に満ちた逸品	
39		御道具附	三斎が、自分の茶会で使った道具を記した貴重な資料	
40		数寄聞書	三斎が伝えた、茶の湯の奥義の数々	
41		高山右近書状	マニラに追放される直前に高山右近が書いた手紙	
42		放下着	よくみると、「放」のヘンとツクリがつながってみえます	
43		機関	大字と細字の対比が見事	
44		唐物茶壷　銘 頼政	「徳川将軍家が持っていた茶壷にも劣らないもの」と評価	
45		瓢花入　銘 顔回	瓢箪の水筒に、花入としての新たな命が吹き込まれた	
46		顔回添状	「形見にあげるつもりだったけど、早く死ねと祈られるのも嫌だから、この花入を贈ります」	
47		竹一重切花入　千利休作	千利休がデザインした、一重切の竹花入	
48		竹尺八花入　千利休作	千利休がデザインした、円筒筒の竹花入	
49		竹二重切花入　細川三斎作	三斎が作った、二重切の竹花入	
50		南蛮芋頭水指	利休、三斎が愛蔵した、里芋のような形の水指	
51		南蛮耳付水指	左右に付いている大きな「耳」が珍しい	
52		香木　銘 蘭奢待	奈良 正倉院に伝わった、名香中の名香	
53		牡丹彫彩漆香合	気の遠くなるような手間ひまをかけて作られた香合	
54		青花擬宝珠香合	コバルトブルーが見事な、宝珠形の香合	
55		松竹梅図釜	立体的に松竹梅図が鋳出された、茶の湯釜	
56		平釜	三斎が持っていたと伝わる、やや平らな茶の湯釜	
57		四方釜　銘 とまや	三斎がデザインした細長い形の茶の湯釜	
58		雲龍釜	千利休がデザインした釜といえばこれ	
59	●重要美術品	唐物尻膨茶入　利休尻ふくら	千利休が愛蔵したことで古来有名な、「大名物」の唐物茶入	
60		唐物尻膨茶入　浅野尻膨	忠利が手に入れた唐物茶入	
61	●重要美術品	瀬戸肩衝茶入　銘 塞	日本の瀬戸地方で焼かれた、「中興名物」の茶入	
62		茶杓　銘 ゆがみ	千利休自作の茶杓の最高峰のひとつ	
63		ゆがみ添状	「この茶杓を差し上げますが、涙をこぼしています」	
64		茶杓　銘 宗易	永青文庫に伝わる、もう一つの利休の茶杓	
65		茶杓　銘 けつりそこなひ	人に差し上げるから、へりくだった銘なのかも	
66		茶杓　銘 鸛	丹頂鶴のような堂々とした端正さを感じさせる	
67		茶杓　銘 さかひ	三斎と交流の深かった、古田織部自作の茶杓	
68		竹蓋置	極めて珍しい、利休の自作の竹蓋置	
69		竹蓋置	堂々として美しい三斎自作の竹蓋置	
70		柄杓	現存する利休作の柄杓はこれだけでは？ ー実は担当学芸員のイチオシ。図録の作品解説もご覧ください	
71		油滴天目	水に浮かぶ油の滴や、夜空に輝く星のように見える文様	

	指定	作品名	学芸員のつぶやき（キャプションコメント）
72		木葉天目	木葉の模様には、葉脈まで観察できます
73		黄天目　珠光天目	茶の湯のスーパースター「珠光（しゅこう）」が持っていたと伝わる
74		亀甲螺鈿天目台	密で細かい文様を、貝で描いているなんて驚き
75		粉引茶碗　大高麗	片口の口を欠いて、茶碗に生まれ変わりました
76		柿の蔕茶碗	お茶が飲みたくなる、渋さがたまらない茶碗
77		熊川茶碗　銘 山名	朝鮮半島産の「真熊川（まこもがい）」茶碗の優品
78		熊川茶碗　銘 夏山	こちらは「鬼熊川（おにこもがい）」茶碗の優品
79	●重要美術品	黒楽茶碗　銘 おとごぜ	三斎がデザインし、長次郎に焼かせた黒色の茶碗
80		掛分茶碗　銘 念八	瀬戸産とも高取産とも考えられる、色の対比が美しい茶碗
81		御家名物之大概	細川家伝来の名品の数々を書き上げた目録
82		茶入茶碗写真帖	よくみて、そして克明に描こう

第３章　永青文庫の名宝

83	◎国宝	太刀　銘 豊後国行平作（古今伝授の太刀）	永青文庫の至宝、名刀中の名刀	※後期
84	◎国宝	短刀　無銘正宗（名物庖丁正宗）	政宗の特徴である刃文の美しさが際立つ	※前期
85		刀　銘 濃州関住兼定作（歌仙兼定）	三斎の愛刀にして、通称の由来が奥深い名刀	
86		歌仙拵	三斎は、武具のデザインも得意だった	
87	○重要文化財	桜に破扇（はせん）図鐔	生命感ある桜と、朽ちていく扇との、美しい対比	
88	●重要美術品	桜九曜紋透鐔　銘 又七	全体で、細川家の家紋「九曜紋」を表現	
89	○重要文化財	金銀玻璃象嵌大壺	その存在感や質量に息を飲む	
90	●重要美術品	金銀象嵌鳥獣文管金具	「美術の殿様」の巴里土産（パリみやげ）	
91	○重要文化財	銀人立像	ちょっと内またぎみなのが、かわいい	
92	○重要文化財	銀製鍍金耳杯	古代中国の人々は、これにどんな飲み物を入れたのか	
93	○重要文化財	銀製刻文杯	金属製の輪が付いている杯	
94	○重要文化財	銀製刻文杯	内側に刻まれた文様が細やかで美しい	
95	●重要美術品	三彩女子	唐の時代の人々が考えていた「美しさ」を、今に伝える	
96	○重要文化財	白釉黒花牡丹文瓶	やわらかさを感じる白地に、牡丹文の黒が映える	
97	●重要美術品	澱青釉紫紅斑盤	燃え上がる炎のような、怪しい魅力に満ちた深紅の模様	
98	●重要美術品	五彩仙姑図花盆	微妙な濃淡をつけて水彩のように描き分けている	
99	●重要美術品	桃花紅合子	実は焼き上げるのが大変難しい	
100		青花梅樹文観音尊	よく見ると、青色が重なったところが盛り上がっている	
101	●重要美術品	琺瑯彩西洋人物図連瓶	西洋的な絵柄ですが、実は中国製	
102		乾山写茶碗	「美術の殿様」自らが描いた老松	
103		鉄絵茶碗　遠山無限碧層々	雄大な山の景色を平茶碗にギュッと詰め込んだ	
104		四季草花文水指	四季の草花文をあっさりと描いた、すがすがしい文様の水指	
105		葉鶏頭絵皿	余技を超えた、眼にも鮮やかな葉鶏頭の絵付	
106		黒茶碗　幽棲	長次郎の世界との共鳴	
107		赤茶碗　花宴	花の時期が待ち遠しい	
108		二曲一隻屏風　衆流截断	作者の信念を示した書	
109		黒楽茶盌　晩成	青みを帯びた窯変（ようへん）が、黒に広がりをもたらす	
110		赤楽茶盌　いよいよ	作者の手の形が伝わった造形	
111		井戸茶盌　白糸威	おおらかな高台や梅花皮（かいらぎ）の柔らかにみる、魅力的な作者の人柄	
112		香木「白菊」（一木四銘の名香）	「寛永行幸」で後水尾天皇の命銘から四百年 森鷗外が小説に書いた「一木四銘（いちぼくしめい）」の名香	